

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6 月 15 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520364

研究課題名（和文） 岡倉覚三と日本美術院の五浦移転に関する比較文化史的研究

研究課題名（英文）

A Comparative Study of Kakuzo Okakura and His Moving the Nihon-Bijutsuin to Izura

研究代表者 清水 恵美子 (SHIMIZU EMIKO)

お茶の水女子大学・お茶大アカデミック・プロダクション・特任リサーチフェロー

研究者番号：20531734

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、1906年(明治39)に茨城県五浦に日本美術院を移転した岡倉覚三(天心、1863-1913)の活動と意義について、多角的な視点から考察することを目的とする。国内外で調査した資料に基づいて、茨城県における岡倉のネットワーク構築と日本美術院受容の諸相、五浦での活動とボストンでの活動との関係性、五浦の位置づけの変容と岡倉像の変遷について検討した。研究成果を学会報告や論文執筆などで社会に発信し、調査を通して収集した資料のデータ入力を終了した。研究の集大成として、発表論文をまとめた単著を刊行するため、現在準備中である。

## 研究成果の概要（英文）：

This study shows Kakuzo Okakura (Tenshin Okakura, 1863-1913) and his work and idea of moving the Nihon-Bijutsuin (Japan Art Institute) to Izura (a coast in Kitaibaraki city, Ibaraki prefecture) from Tokyo in 1906. Based on various archival data from Japan and overseas, the findings suggest how he constructed a human network in Ibaraki, as well as how people lived there at that time accepted the Nihon Bijutsuin. This is a comparative analysis of his work of Izura and Boston, of which result shows a clear correlation with his activities in managing organizations at these separate locations across the ocean. We found that the significance of Izura and Okakura's image have been changed in successive period. These results are being prepared to be published as a series of Izura Historical Library.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学 比較文学比較文化／美術史

科研費の分科・細目：文学 各国文学・文学論

キーワード：岡倉覚三、岡倉天心、日本美術院、五浦、ボストン美術館、比較文化、美術史、芸術思想

## 1. 研究開始当初の背景.

### (1) 研究代表者の研究成果

研究代表者はこれまで岡倉覚三のボストン美術館勤務時代（1904～1913）における諸活動と、その基盤となる芸術思想について研究を行ってきた。合衆国での現地調査を通し、岡倉がボストンの社会および文化的状況を的確に把握しながら、一貫した理念のもとでアジア文化の紹介に努めていたことを、美術館経営、美術、演劇、音楽の諸分野における活動から実証した。集積した研究成果は博士論文「岡倉覚三の思想とボストンにおける活動—ボストン美術館経営と『白狐』執筆を中心に—」（2008）として結実した。これを踏まえて、ボストン時代と同時期の五浦時代について検討することが次の課題となった。

岡倉が五浦の土地を購入したのは 1903 年のことである。その翌年には渡米し、ボストン美術館での勤務を開始した。1905 年、米国から帰国した岡倉は東京から五浦に転居、以降 1913 年に死去するまで二つの拠点を往復する生活を続けた。そのため岡倉の晩年の活動を考察するには、日本とアメリカの 2 地点から照射する必要がある。課題追究の端緒として、美術院移転について論じた小論「茨城における日本美術院五浦移転の意義」（『地方史研究』334 号所収）を發表し、問題提起を行った。

### (2) 本研究に関する研究動向

五浦の美術院移転に関する先行研究としては、移転の経緯や美術院研究所の建築について考察した後藤末吉論文（1985）や、茨城県における美術院受容について論じた藤本陽子論文（1992）が挙げられる。だが、同時期に岡倉がアメリカで行った美術活動との比較や、岡倉没後の五浦の位置づけの変容を考察した上で、その意義を言及するまでには及んでいなかった。

一方、五浦関連資料の多くは、茨城大学五浦美術文化研究所の発足時に集約され、『収蔵品目録 I』（1982）が作成された。しかし茨城県内を含め国内外の関連施設には未発表の資料が所蔵されている可能性があり、調査の必要が生じていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、五浦に日本美術院を移転した岡倉覚三の活動と意義について考察することを目的とした。日本側とアメリカ側の視点から双方向的に彼の諸活動の意義を考察し、それらに通底する思想を見出すことで研究の発展を目指した。

その際の論点は次の三点である。

(1) 岡倉はなぜ五浦に日本美術院を移転したのか。

岡倉と五浦との関係はどのように形成され、それが日本美術院の移転にどう反映されたのか、岡倉及び日本美術院と、茨城県の人々との交流の軌跡を照射した。地域の社会的・文化的環境の特色と、支援の基盤となった人脈構築、日本美術院移転を受容した地域の目的と役割から、移転を可能にした現実的な理由を検討した。

(2) 五浦での活動とボストンでの活動は、どのような関係性があるのか。

日本美術院の五浦移転とそこでの活動を岡倉の組織経営という観点から、ボストン美術館経営と比較し、それらの共通性や差異性を考察した。これまでの美術史、文化史の視座からのアプローチを再検討しながら、従来試みられなかった茨城とボストンの 2 地点から岡倉の活動を照射する比較文化的方法論を用い、新たな知見の獲得を目指した。

(3) 五浦の美術思想史的位置はどう変わり、岡倉像はどのように変遷したのか。

岡倉の生前だけでなく、その没後から戦後までの長い期間を射程に入れて、日本美術院五浦移転の美術史的・思想史的意味を検討した。あわせて、五浦を取り巻く環境や、その位置づけの変容に伴って、岡倉の人物像がどのように変遷していったのかを考察した。

## 3. 研究の方法

本研究の具体的作業は、次の四点である。

(1) 国内外における資料調査

五浦及び茨城県関連資料、ボストンの関連施設、岡倉顕彰会の資料を調査した後、調査範囲を日本国内、インドの関連施設に拡大した。さらに、これまで調査が不十分であった諸施設の資料も再調査した。

(2) 論文執筆と学会等での発表

資料調査の結果と先行研究をふまえて、目的に掲げた三つの論点、すなわち①岡倉の五浦移転と茨城県における日本美術院の受容、②五浦の位置の変容と岡倉像の変遷、③五浦とポストンの活動の関係性について考察し、論文執筆や学会報告を通して、研究成果を社会に発信した。

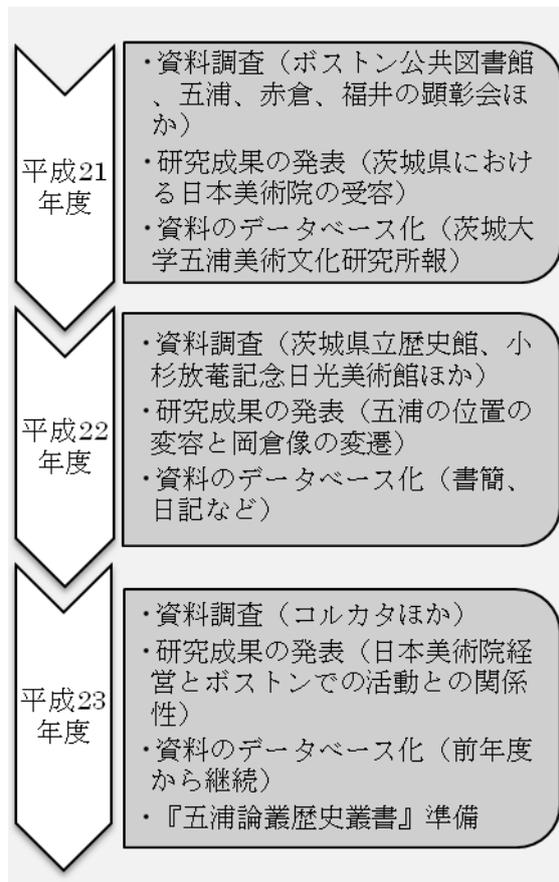
(3) 資料のデータベース化

調査の過程で収集した未発表の第一次資料(書簡、日記など)は、解読して筆耕し、電子データ化を試みた。画像データも同様にデータベース化した。

(4) 研究成果の刊行準備

最終年度は、三年間の研究成果をまとめ、『五浦論叢歴史叢書』シリーズの一冊として刊行できるよう準備を行った。

<研究の流れ>



4. 研究成果

三年間の研究を通じて得られた成果を、(1) 調査による新資料の入手、(2) 学会・論文等での発表、(3) 資料データベースの

完成、(4) 成果の総括と発展、(5) 今後の展望の五点からまとめる。

(1) 調査による新資料の入手

2009年はボストン公共図書館等における資料調査で、新資料(岡倉及び日本美術院関係者に関連する書簡数通)を確認した。また、現在岡倉天心顕彰会を有する北茨城市、妙高市、福井市を訪れ、各地の顕彰会代表者に会い、戦中・戦後の顕彰活動についてインタビューを実施するとともに、関係資料の提供を受けた。

2010年は茨城県立歴史館、野口雨情生家資料館、小杉放菴記念日光美術館、井原市立田中美術館等の所蔵資料を調査した。特に小杉放菴記念日光美術館で、戦後赤倉で行われた「天心祭」を記録した小杉放菴の日記や写真を得たことは有意義であった。

2011年は岡倉が五浦移転の前年に訪問したコルカタやシャンティニケトンなどで実地調査を行った。関連施設の視察と現地資料の入手、現地の研究者との意見交換により、課題追究のさらなる手がかりを得た。

(2) 学会・論文等での発表

目的に掲げた三つの論点の研究成果について、次のように発表を行った。

① 岡倉の五浦移転と茨城県における日本美術院の受容

従来の研究では十分追究されてこなかった日本美術院と茨城の知識人層との交流の軌跡を照射した。岡倉と五浦との関係はどのように形成され、それが日本美術院の移転や活動にどう反映されたのか。日本美術院を受容した地域の目的と役割について考察し、「茨城県における日本美術院の受容」(『茨城県史研究』94巻所収)等の論文執筆や岡倉天心研究会例会(2009)等にて報告を行った。

これらの発表は、五浦での岡倉の人脈構築における野口勝一の役割、美術院移転を受容した地域の社会的・文化的特色、「いはらき」新聞や地元有力者による支援の諸相を明らかにした。

例えば「野口勝一日記」には、野口と横山大観ら日本美術院の画家、県内の有力者、「いはらき」新聞とのつながりが記されている。岡倉が、野口を通して茨城の有力者層に受容される形で、五浦と県央を結ぶラインに人脈を築いていき、日本美術院を受容する基盤を構築していったことが窺える。

また、茨城の文化ネットワークには、斎藤隆三、小杉放菴、小川芋銭等が所属しており、彼らは岡倉没後に再興を果たした日本美術院の一員となった。再興日本美術院に茨城に関係の深い人々が集まったことから、県内における美術の発展と後進の育成を目的に、

1923 年から茨城美術展覧会が開催されることとなる。それを主催したのは、五浦移転以来、日本美術院とのつながりを強めた「いはらき」新聞であった。

このように、日本美術院と地域との関係は希薄なものではなく現在流通する五浦イメージ（「隠棲地」）との間に乖離があることを浮き彫りにし、研究の発展に寄与する問題提起を行った。

## ②五浦の位置の変容と岡倉像の変遷

岡倉の生前だけでなく、その没後から戦後までの長い期間を射程に入れて、彼がどのように表象されてきたか、現在顕彰会を有する北茨城市、妙高市、福井市の顕彰活動を中心に論じ、「岡倉天心の顕彰をめぐって——五浦・赤倉・福井を中心に」（『五浦論叢』17号所収）として発表した。

戦時中の岡倉顕彰は、時局を正当化する先覚者として、彼の思想やことばを読みかえ、普及させていく活動であった。その動きを端的に示すのが「亜細亜は一なり」を取り巻く言説である。岡倉天心偉績顕彰会は、戦争のテーゼとなったこの言葉を石碑に刻み、五浦と赤倉に設置した。これらの石碑は、国家が美術を主導したイデオロギー性の強い時代に創出された「岡倉天心」像を提示する。

一面的な評価を行ってきた戦時中に対し、戦後は、岡倉ゆかりの地に住む人々が主体となって、地域との関わりを重視した独自の活動を展開してきた。現在、地域にとって「岡倉天心」は観光資源であり、顕彰活動を推進する文化資源であり、文化振興と活性化に寄与する存在である一方、依然礼拝の対象でもある。

また、ゆかりの地に点在する石碑や彫像は、語られる主体となった「岡倉天心」の諸相を浮き彫りにする。たとえば赤倉には、岡倉没後に置かれた「天心岡倉先生終焉之地」、戦時中に設置された「亜細亜一なり」、「天心岡倉先生終焉之地」、戦後建てられた「六角堂」が同敷地に設置され、時流とともに変遷する岡倉像の可視化空間となっている。

こうした石碑や彫像の存在する空間は、横浜市、東京都谷中、福山市など各地に点在する。これらを対象に実地調査を実施したが、入手したデータを分析し、その結果を発表するまでには至らなかった。今後さらなる検討が必要と考える。

## ③五浦とボストンの活動の関係性

一般に岡倉の晩年は「五浦時代」と称されるが、それがほぼボストン美術館勤務時代と重なっているために、ボストン側と五浦側の視座から双方向的に彼の活動を見ることが必要であった。

そこで、五浦訪問から死去するまでの十年

間を三つの時期：五浦発見から日本美術院移転準備まで（1903～1905年）、日本美術院移転から第一回文展まで（1906～1907年）、大観と春草の帰京から岡倉死去まで（1908～1913年）に区分して、それぞれの時期における活動を、ボストンにおける活動との連動性という視座から分析し、五浦という空間の役割・意義とその変容について考察した。

地域における人脈構築の共通性、ボストン美術館での資金確保によって日本美術院五浦移転が具体化した可能性、岡倉の仕事の優先順位が、文部省展覧会における画家たちの受賞を契機に、ボストン美術館中国日本美術部の経営に移行した可能性を明らかにした。

さらに五浦とボストンの活動の連動性は、五浦の持つ二面性とその空間の変容について考察する手がかりとなった。岡倉はボストン美術館勤務を前に、五浦の自然の中に理想の世界を求めたが、このとき五浦は私的な空間としてあった。やがて日本美術院の再起という使命を実現すべく四人の画家をそこに移転させようとしたが、このとき五浦は公的な空間へと変容した。第一回文展後に大観と春草が帰京し、画家たちが独自に制作に励むようになると、五浦は公的な空間から再び私的な空間へと戻った。

ここから、五浦の相反する二つのイメージ「日本美術院の移転先」と「隠棲地」は、矛盾するものではなく、時期によって五浦の役割や位置づけが変容していったことを示唆しており、どちらも「五浦時代」を象徴している。この二面性こそが、五浦という空間を読み解くキーワードだったと考えられ、日本フェノロサ学会大会（2011）にて研究発表を行った（報告内容は LOTUS 32 号に論文として掲載された）。

## （3）資料データベースの完成

調査の過程で収集した資料のうちデータベース化が完了したものは次の通りである。

①『茨城大学五浦美術文化研究所報』全 13 巻全頁の画像を電子データで保存した。また収録された全ての記事を掲載順、著者別、論文、資料に分類、インデックスを作成し、データベース化を行った。

②個人収集家が所蔵する日本美術院画家に関連する書簡 150 通余を貸与され、筆耕を行った。書簡には、五浦時代の木村武山の書簡、岡倉没後の茨城新聞記者宛横山大観書簡などが含まれる。

<データベース化した書簡の一部抜粋>

差出人	数	差出人	数
岡倉 覚三	3	横山 大観	16

木村 武山	6	飛田 周山	11
小杉 放菴	45	小川 芋銭	2
荒井 寛方	1	板谷 波山	6
国木田独歩	23	九鬼 隆一	6
石井 鶴三	4	浅井 忠	5
木村 莊八	5	森田 恒友	4
石井 柏亭	2	足立源一郎	2
山本 鼎	1	和田 英作	1
中川 一政	1	小山 敬三	1
林 倭衛	1	中村 岳陵	1

③上記資料に加えて、国内調査で収集した資料のうち、未発表の書簡および日記等の文字資料はすべて筆耕し、電子データとしてテキスト入力を終えた。デジタル撮影した画像資料と合わせ、これら資料はデータベース化を完了している。

#### (4) 研究の総括と発展

国内外で収集した資料をもとに、日本美術院移転以前から、岡倉が茨城県の知識人層の中に人脈を形成していたこと、特に北茨城出身の政治家野口勝一の役割や、岡倉没後も継続する茨城新聞社と日本美術院との関係について明らかにすることができた。

また、岡倉の五浦での活動とボストン美術館での活動を比較することによって、岡倉が日本とアメリカで一貫した理念のもとに活動していたことが明らかになった。

さらに、研究計画時に予想していた以上の研究の発展がみられた。それは仏教・渡印・五浦移転の関係性である。

岡倉は日本美術院の活動が停滞した 1901 年、突然渡印し、帰国後、拠点を東京からボストンと五浦に移して再起を図った。岡倉の人生は、渡印を挟んで挫折から再起へと転換しており、インドでの体験がアジア観の構築だけでなく、五浦移転につながる転機となったと考えられる。このような問題意識から岡倉のインド体験の意義を再考し、「岡倉覚三とインド——転回点」(『茨城大学人文科学研究』3 巻所収)として発表した。

この論文は、すでに研究蓄積のある岡倉と詩人タゴールとの関係のみではなく、従来等閑視されていた岡倉の仏教者としての側面と、ヒンドゥー僧ヴィヴェーカーナンダとの交流を照射することで、インド体験が帰国後の渡米と五浦訪問に及ぼした影響を明らかにした。岡倉がインドを訪れたのは、仏教と日本美術の源流を探し求めることによって理想に立ち返り、自己の使命を再認識する旅であり、渡印は、岡倉の人生にとって重要な転回点であったと指摘した。

これらの成果を発信し得たことは、従来の「五浦時代」の位置づけを覆すインパクトを持ち、岡倉研究の発展に寄与したと考える。

研究成果は、学会での口頭報告、論文発表とともに、茨城県北ジオパーク「インタープリター」養成講座の講義、六角堂再建記念・観星会の講演(北茨城市)、エッセイなど、アウトリーチにて発信した。

さらに、岡倉のボストン美術館経営と未発表の英語著作を論じた著書『岡倉天心の比較文化史的研究——ボストンでの活動と芸術思想』(思文閣出版)を 2012 年に刊行した。

#### (5) 今後の展望

三年間の研究成果の発表を目的に単著刊行の準備を進め、基となる発表済の論文や収集した資料は十分な量に達している。出版社も決定しており、刊行準備は順調に進んでいる。単著として今年度中に刊行することを目指す。

データベース化を終えた未発表資料については、学会報告や論文執筆を通して公開していく予定である。

また、インドにおける美的・宗教的交流、五浦に移転した画家たちと地域との関わりに関しては、さらなる実地調査や論文の執筆を行い、本研究を発展させていきたい。

五浦に移転した画家たちの活動についても考察する予定であったが、残念ながらその成果を公表するには至らなかった。また五浦移転の観点から『茶の本』のテキスト分析を行う予定であったが、岡倉の宗教観をさらに追究する必要性を認識したため、今後の課題とした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

① 清水恵美子、岡倉覚三の「五浦時代」——インド・ボストン・茨城の視点から、日本フェノロサ学会会誌 *LOTUS*、査読有、32 号、2012、未定

② 清水恵美子、岡倉覚三とインド——転回点としての渡印、茨城大学人文科学研究、査読有、3 巻、2011、13-33  
茨城大学機関リポジトリ  
<http://hdl.handle.net/10109/2758>

③ 清水恵美子、日本美術院の五浦移転に関する一考察——岡倉覚三のネットワーク構築と野口勝一の役割、比較日本学教育センター研究年報、査読無、7 号、2010、301-308

④清水恵美子、岡倉天心の顕彰をめぐって——五浦・赤倉・福井を中心に、五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要、査読無17号、2010、1-25  
茨城大学機関リポジトリ  
<http://hdl.handle.net/10109/1773>

⑤清水恵美子、岡倉覚三と日本美術院の五浦移転、岡倉天心研究会会誌 鵬、査読無、5号、2010、3-12

⑥清水恵美子、茨城県における日本美術院の受容、茨城県史研究、査読無、94巻、2010、37-54

⑦清水恵美子、吉成英文氏所蔵岡倉覚三書簡・横山大観講演録、五浦論叢：茨城大学五浦美術文化研究所紀要、査読無、17号、2009、99-107  
茨城大学機関リポジトリ  
<http://hdl.handle.net/10109/1076>

〔学会発表〕(計4件)

①清水恵美子、海を越える狐の音楽劇——オペラ台本 *The White Fox*『白狐』について、文化資源学会博士号取得研究発表会、2011年12月3日、東京大学

②清水恵美子、岡倉覚三の五浦時代、日本フェノロサ学会大会、2011年9月16日、同志社大学

③清水恵美子、岡倉覚三と日本美術院の五浦時代、近代茨城地域史研究会例会、2011年2月26日、茨城県友部公民館

④清水恵美子、岡倉覚三と日本美術院の五浦移転、岡倉天心研究会例会、2009年6月27日、奈良女子大学

〔図書〕(計3件)

①清水恵美子、岡倉天心の比較文化史的研究——ポストンでの活動と芸術思想、思文閣出版、2012、総頁548

②小泉晋弥、池田幸雄、清水恵美子、五浦六角堂再建記念 五浦と岡倉天心の遺産、「五浦六角堂再建記念 五浦と岡倉天心の遺産展」実行委員会、2012、142-148

③高階秀爾、上野浩道、山口静一、小泉晋弥、中村愿、ルストム・バルーチャ、清水恵美子、他、いま天心を語る—東京藝術大学創立120周年岡倉天心展記念シンポジウム、東京藝術大学出版会、2010、151-159

〔その他〕(計5件)

①清水恵美子、岡倉覚三とヴィヴェーカーナンダ、鴨東通信 No. 85、2012、10-11

②清水恵美子、宇宙と天心と絵の世界、六角堂再建記念・観星会、2012、北茨城市・茨城大学、精華小学校

③清水恵美子、岡倉天心と日本美術院の五浦時代、日本文化塾講演会、2011、東京国立博物館平成館

④清水恵美子、茨城県北の文化 日本美術院の五浦移転について、茨城県北ジオパーク「インタープリター」養成講座、2010、2011、高萩市総合福祉センター、茨城大学

⑤清水恵美子、アメリカとアジア：岡倉研究の将来に向けて—ガードナー美術館とハーヴァード大学における研究会報告、あいだ161号、『あいだ』の会、2009、18-23

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

清水 恵美子 (SHIMIZU EMIKO)

お茶の水女子大学・お茶大アカデミック・

プロダクション・特任リサーチフェロー

研究者番号：20531734

### (2) 研究分担者

無し

### (3) 連携研究者

無し